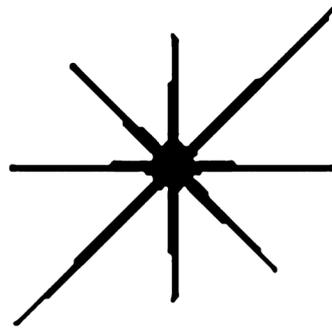


コメット通信 14

[21年9月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

3人のヴィリエ・ド・リラダン

宮下志朗—————3

【特集 ミハイル・バフチン】

ミハイル・ミハイロヴィチ，あなたはいったいなにものですか？

番場俊—————5

バフチンの哲学的源泉について私が推測する二，三の事柄

貝澤哉—————7

バフチンと日本近代哲学

——1920年代バフチンの行為の哲学と1930年代日本の哲学文化

佐々木寛—————10

バフチン先生は何を学生たちに教えたのか

——対話理論と教育実践

田島充士—————13

バフチンの〈対話主義〉の効用

桑野隆—————16

【追悼 ジャン＝リュック・ナンシー】

微笑みを差し出しつつ……

小林康夫—————20

だれであれ「共に」

安原伸一郎—————22

透明な点

伊藤潤一郎—————23

【追悼 立花英裕】

あまりにも早い，その旅立ちに寄せて

中村隆之—————27

【追悼 高橋透】

サイボーグの心を追い求めた哲学者

坂内太—————29

【連載】

グラシリアノ・ハーモス『乾いた人びと』について

——Books in Progress 12

村山修亮—————30

『赤毛のアン』から『更級日記』へ

——裸足で散歩 14

西澤栄美子—————31

3人のヴィリエ・ド・リラダン

宮下志朗

A 「リラダン読んだか？」

B 「リラダンじゃなくて、ヴィリエ・ド・リラダン」

C 「フルネームはジャン＝マリー・マチアス・フィリップ・オーギュスト・ヴィリエ・ド・リラダン」

ぼくらはこの儀式を経てヴィリエの話に入る。そして齋藤磯雄訳『残酷物語』を読んだ。原文は彫琢をきわめた文体で、その名訳だと囁かれていた。そうなのだろうが、ループした言い回しも多くて、文章のリズムに慣れないと、茫洋としたまま話が終わってしまう。冒頭の「ビヤンフィラートルの姉妹」, 「ギースの彩管」とか, 「錠前に連結している例の長い縋紐にぶらさがる」仕事とあっても、ぴんと来なかった。画家ギースも、彩管の意味も知らず、昔のパリの管理人なる存在をイメージできないまま、ぼくらは背伸びして読んでいた。原文を読めるようになって、手ごわさというヴィリエの魅力に変わりはなかった。

それから半世紀以上経った。待望の新訳で『残酷物語』を読んでいるが、ここでは中世物について。「王妃イザボー」は、愛人を放火犯に仕立てて殺そうとする怖い話だ。その書き出し、奢侈・退廃にふける宮廷の描写が、いつの間にかブルゴーニュ公ジャン（無怖公）のことに切り替わる。しかも、「まさしくこの時期、陰鬱に、衆人から離れ、自分の〈領国〉でまずはこれら唾棄すべき租税すべてを廃止しなければと考える、ジャン・ド・ヌヴェール」から始まって、「無怖公ジャンは、〈祖国〉を救うべく」まで、修飾表現が婉々と続く。ヴィリエならではのスタイルで、ストーリー的には省けそうだが、ここは必然なのである。実は無怖公の腹心として、パリ西部の要衝ポントワーズの攻防やパリ奪回で手柄を立て元帥（マレシャル）に任ぜられたのが、かのジャン・ド・ヴィリエ・ド・リラダンなのだ。作家は、名前を出さずに先祖の武運と遺徳を顕彰している。

無怖公が暗殺されて、息子フィリップ善良公の時代。「[1429年7月]ブルゴーニュ公がパリを離れた。リラダンの領主がパリの隊長を命じられた」と『パリ市民の日記』は伝える。王都に敵軍が迫り、防衛隊長ジャン・ド・ヴィリエが市門を閉めさせる。そして9月7日の『パリ市民の日記』。

アルマニャック派がパリの城壁に襲いかかり、パリ市の占領をもくろんだが、ほとんど叶うことなく、苦しみと、恥辱と、不運にまみれるしかなかった。[……] 愚かなやつは、痛い目にあうまで信じない。[……] なにせ連中は、同行した〈乙女〉と呼ばれる女の形をした者が言うことを、まちがって信じこんだのだ。[……] 〈なにを、このアマ、淫売め！〉とだれかが言った。大弓を彼女めがけてまっすぐ射ると、脚に突き刺さり、彼女は逃げた。

オルレアンを解放したジャンヌ・ダルクも、首都奪還には失敗したのである。今もサン＝トノレ通り163番地には、「乙女」の負傷を記したプレートと肖像がある。この日、防衛隊長ジャンの視線はジャンヌを見据えていた。『残酷物語』の作者も、その光景を思い描いただろうか？

そしてジャンの長男ジャック・ド・ヴィリエ、この人は、パリ奉行として、かの泥棒詩人と視線を交わした可能性がある。1462年、カルチエ・ラタンでの喧嘩沙汰に巻き込まれたフランソワ・ヴィ

ヨンが、いわば「累犯加重」によって死刑判決を受けた時のことだ。碩学チャンピオンはこう書く。

リラダンの城主はというと、おのれの前任者ロベール・デストートヴィルが保護していたこの貧乏学生には、慈悲をかけてやる理由など何一つ持ち合わせていなかった。[……] ヴィヨンは、死刑に、「パリノ獄門ニテ絞首ニ」処せられることとなった。

(『フランソワ・ヴィヨン 生涯とその時代』佐藤輝夫訳、筑摩書房)

絞首刑は不当だと上訴した詩人は、「上訴のバラード」で、「まったくのいかさまで、／あんな勝手な刑罰を下されても、／わたしは黙っているべきだったとでも？」と歌った。パリ奉行といえば雲の上の人、詩人が直接に拝顔したのですかと問い詰められると自信はないけれど、その姿ぐらひは思い浮かべただろう、恨めしい気持ちで。「わたしはフランソワ——このことがつらい／生まれはパリ、ポントワーズの近くさ」という、名高い「四行詩」の不可思議な一節のヒントも、ポントワーズという、ヴィリエ家の近くで縁の深い地名にあると思う。つまり、情け容赦ない「リラダンの城主」が司法警察トップであるからには、累犯での極刑は免れないかもという不安が、この詩行に込められているのだ。それはさておいて、判決がくだる。

「上記の判決に対して控訴がなされ、法廷は原判決を破棄し、上記ヴィヨンの悪辣なる生きざまにかんがみて、被告を10年間、パリ市から追放に処する。」以後、ヴィヨンの行方は杳として知れず、作品と伝説が残された。

大貴族の末裔ヴィリエ・ド・リラダンの作品に接していると、中世の二人のヴィリエのことを思い出さずにいられない。

執筆者について――

宮下志朗(みやしたしろう) 1947年生まれ。専攻＝フランス文学。主な著書には、『本の都市リヨン』(晶文社、1990年)、『読書の首都パリ』(みすず書房、1998年)、『カラー版 書物史への扉』(岩波書店、2016年)など、小社刊行の主な訳書には、ニコラ・コンタ『18世紀印刷職人物語』(2013年)がある。

【特集 ミハイル・バフチン】

ミハイル・ミハイロヴィチ、 あなたはいったいなにものですか？

番場 俊

最近ではバフチン研究者を自称することもなくなってしまったとはいえ、修論はバフチンだったから、筆者とバフチンの付き合いもかれこれ四半世紀におよぶはずだが、いまだにバフチンがどういう人なのかよく分からない。このたび待望の邦訳が刊行されたバフチンのインタビュー集（『[バフチン、生涯を語る](#)』佐々木寛訳、水声社）に眼を通して、あらためてそう感じた。この本に含まれている情報量が少ないというわけではない。——それどころではない、この本からは、過酷なソ連時代を生き抜いた一知識人の姿が豊かなディテールとともに生き生きと伝わってくるし、同時代のフォルマリストたち（シクロフスキーをはじめとするペテルブルクの若き文学者・言語学者たちのサークル「オポヤーズ」（詩的言語研究会））との関係のなさに（第2回インタビュー）、1920年代にすでにロシアで全集が刊行されつつあったフロイトに対する異様に高い評価など（第5回）、ここからしか得られない貴重な情報も満載である。それはたしかにそうなのだが、飼い猫を愛撫しながらインタビューに答える老いたバフチン——本書には貴重な写真も多い——が、私たちが著作から知っている彼の姿に、あまり似ているようにはみえないのも事実なのである。だってそうではないか。画家のマレーヴィチやピアニストのユージナとの交友関係は、文化史上の興味深い一挿話としてはともかく、バフチンの著作の理解にさほど寄与するものではないし、なによりも私たちが知っているバフチンはドストエフスキーの、そしてラブレーの読者であり、小説の理論家であったのに、インタビュアーにおだてられて彼が得意げに披露するのは詩の暗唱ばかりで、しかもそれがゲーテのドイツ語であったり、ボードレールのフランス語であったりするのである！

翻って考えてみれば、そもそもバフチンを何と呼んだらよいのか。彼自身の答は明快にみえる。「文学者よりも、哲学者です。哲学者。今日にいたるまでずっとそうだった。わたしは哲学者です。思想家です」（第1回）。たんなる文学研究者ではなく、哲学者としてのバフチン——このような理解が、これまでのバフチン研究の変遷に反映していることはたしかだ。ロシア本国でもアメリカでも日本でも、まず最初に刊行され、翻訳されたバフチンの書物はドストエフスキー論をはじめとする文学研究だった。ずっと後になって、『行為の哲学によせて』とか『美的活動における作者と主人公』といった初期の哲学的著作が刊行されてはじめて、「バフチン研究」とか「バフチン学」と呼ばれる専門研究の興隆がもたらされたのである。だが、「文学者よりも、哲学者」という先のバフチンの言い方には注意が必要だ。「文学者」の原語は「フィローロク」であり、狭義の「文献学」「言語学」「文学研究」を包含する概念であって、日本語でいう「文学者」とはいささかニュアンスが異なる（今日でもロシアでは文学部を「フィロロジー・チェスキ・ファクリチュート」と呼ぶが、そこには歴史学は含まれない）。だが別の箇所（第2回）では、同じ「フィローロギ」（複数形）という語（今度は「文献学者たち」と訳されている）によって、ボドゥエン・ド・クルテネの影響下から出発したロシア・フォルマリストたちが指示されており（インタビュアーのドゥヴァーキン「その一群の若い文献学者たち、文学研究者になった言語学者と、言語学者になった文学研究者のすべて」という言い方をしている）、今日でいう「文芸学」（＝文学研究、リチュラトゥロヴェージェニエ）が当時生まれたばかりの新語であったことが強調されている。だからバフチンが「文学者」という言い方で距離を置こうとし

ていたものが正確に何であったかは、慎重に検討しなければならないのだ。そればかりではない。「哲学」という語そのものが、バフチンにあっては境界的にしか定義されないのである。1959年から60年にかけて執筆された草稿「テキストの問題」に「哲学的分析の試み」という副題を付したバフチンは書いている。「この分析を哲学的と呼ぶのは、なによりまずその否定的な性格を考慮したからである。これは言語学的な分析でも、文献学的な分析でも、文学研究的な分析でもなく、他のなんらかの専門的な分析（研究）でもない。積極的な言い方をするなら、この研究は境界的な諸領域で動いているということになろう。上述のディシプリンすべての境界、それらが接合し、交錯するところで動いているのだ」。「文学者よりも、哲学者」という先のバフチンの言い方は、したがって、「ミハイル・ミハイロヴィチ、あなたはなにものですか？」という問いに答えてくれるものではない。むしろそれは「文学者でもあり同時に、哲学者」と言い換えたほうがよいのだ。そのほうが、バフチンのインターディシプリナリーな姿勢にはふさわしい。

だが、「学際」とか「領域横断」などといった符牒が飛びかう今日、ふとこんな気もしてくるのだ。「バフチンは学際的な思想家だなんて、そんな月並みな言い方ですましてしまって、いいの？」いっそのこと、先のバフチンの言葉をもう一段先まで言い換えてみてはどうか？——「哲学者よりも、文学者」と。

バフチンはドストエフスキーを読み、ラブレーを読み、ゲーテやソシュールを読んで、それについて書いた。バフチンのすべてはそこにあるのであり、すべてはそこから発しているのであって、ドストエフスキー論やラブレー論よりも上位の水準に想定される「バフチンの哲学」などというものはないと考えてみたらどうだろう。それは、フーコーがいう「作者の機能」の四つの基準——価値水準の一定性、概念的・理論的統一性、文体上の均一性、歴史上の一定点としての作者（「作者とは何か」）——からバフチンを解き放ち、むしろ「バフチン＝ドストエフスキー」や「バフチン＝ラブレー」というカップル、あるいは「バフチン＝ヴォローシノフ」や「バフチン＝メドヴェージェフ」というカップルにおいて起こる出来事の分散状態を見定めようと試みることだ。あるいは、先に名前を挙げたフロイトにならって言い換えるなら、このようになろうか——バフチンとドストエフスキーやラブレーの関係を、フロイトとアンナ・Oやイルマとの関係、あるいはフロイトと狼男のような関係としてとらえること。イルマの夢やアンナ・Oの症状と出会うことなしにフロイトの夢解釈やヒステリーの理論はありえなかったのだし、「原光景」や「排除」の概念はフロイトと狼男の共同作業の所産であったというほかはない。一方が他方を誤読したとか正解したとかいった問題ではないのだ。イルマの夢を読むことがフロイトを読むことであるように、ドストエフスキーを読み、ラブレーを読むことがすなわちバフチンを読むことであって、そのときバフチンは、互いにあまり似ていない複数の顔を私たちに向けることになるだろう。バフチンを、あえて「哲学者よりも、文学者」と呼ぶとは、そういうことだ。バフチンの著作をあまりよく理解しているようにはみえない『バフチン、生涯を語る』のドゥヴァーキンが期せずして引き出すことに成功しているのは、「文学者」としてのバフチンの別の顔なのである。

執筆者について——

番場俊（ばんばさとし） 1969年生まれ。新潟大学教授。専攻＝ロシア文学、表象文化論。主な著書に、『顔の世紀』の果てに——ドストエフスキー『白痴』を読み直す』（現代書館、2019年）、『ドストエフスキーと小説の問い』（水声社、2012年）などがある。

【特集 ミハイル・バフチン】

バフチンの哲学的源泉について私が推測する 二、三の事柄

貝澤 哉

1980年代初期のT・トドロフのバフチン論以降流布した見解——作者が一方的に主人公を美的客体として造形するかのような『作者と主人公』に代表される1920年代初期のバフチンの小説論や、それにとまなうドストエフスキへの低い評価が、20年代後期の言語論的転回を経て、「他者の言葉」や「対話」、「ポリフォニー」を軸にした『ドストエフスキの創作の諸問題』における作者と主人公の言葉の対話的同権性の発見と、それにとまなうドストエフスキの高評価へとドラスティックに転換し、それがのちの「カーニヴァル」や「笑い」、「多言語性」、「多声性」の小説理論へと進化してゆくかのような見方——をいまだに主張するような人は、さすがに最近では見かけなくなった。

こうした見方は、バフチンの仕事を狭義の近代的な文学・小説理論の学問的な枠内、つまり小説作品内やその言語記号の構造的な枠組みからしかとらえようとしないうことで生じたあきらかな誤解にすぎない。そもそも、バフチンの探求を当時の言語論的転回、すなわち記号論・構造主義や言語学的詩学の延長線上で捉えようとする自体、根本的な誤りというほかない。というのも、初期から一貫してバフチンが目指していたのは、むしろそうした近代人文科学の、あまりに科学的に理論化・合理化されすぎた視野狭窄的なあり方への根源的な批判にほかならなかったからだ。

事実バフチンは、みずから「文芸学者」や「言語学者」と名乗ったことはない。最晩年のインタビュー『バフチン、生涯を語る』のなかでも彼は、「文学者よりも、哲学者です。[……] 今日にいたるまでずっとそうだった。わたしは哲学者です。思想家です」（佐々木寛訳）とことさら強調している。しかもバフチンが目指した「哲学」とは、『行為の哲学によせて』の表現を使うなら、「現代哲学の世界、理論的な文化の世界」にかんする個別的なディシプリンとしての哲学理論などではない。それは、我々の生の「単一で唯一の存在の出来事」全体を包括しうる原理としての「第一哲学」、すなわち「この世界にかんする一般的な諸概念、諸命題、諸法則を構築するのではなく、ただこの行為の世界を記述するような現象学でしかありえない」のである。

言いかえれば彼の哲学的目標は、「理論化」以前の、つまり個々の学問の認識論的な対象化・客体化や一般概念化、命題化、法則化、細分化に先立って、その根源的基盤となるような先験的・超越論的条件としての我々の生の生起の具体的なあり方をトータルに捉えることなのであり、そこでは「文芸学」や「言語学」、ましてや「小説学」のように、個別学へと理論化、概念化、客観化されてしまった諸分野など、生の出来事の全体から見れば、極度に矮小化・抽象化された小部分を占めるものでしかない。だから、バフチンを文芸学者・小説理論家と捉えたときにあたかも彼の理論的「進化」のように見えるものもまた、いずれも「生の存在＝出来事」全体を包括する「第一哲学」の超越論的条件のなかにもともと潜在的に含まれている理論的可能性の多様な発現の、ほんの一例にすぎないのである。

もちろん周知のように、理論的認識や学的な対象化・概念化に先立ち、それを可能にする生や経験の先験的条件のこうした究明に手を染めたのは、なにもバフチンが最初というわけではない。19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、とりわけドイツの文献学や哲学は、この方向ですでに大きな進展をとげていた。

たとえば、シュライアーマッハーの教えも受けた文献学者アウグスト・ベークは、歴史学や文献学の可能性の条件を「〔過去の誰かが文献などに遺した〕認識の〔それを読む他者による再〕認識」と捉えたが、それを受け継いだヴィルヘルム・ディルタイは、その「生の哲学」や「解釈学」の構想のなかで、「精神科学」、つまり今日で言う人文科学の根源的条件を、過去の誰かの具体的・歴史的な生の「体験」の「表現」が、他の誰かによってさらに解釈されること（「理解」）だと考え、それを精密科学（自然科学）における普遍的法則や一般理論の非人称的な「説明」と区別しようとした。

興味深いのは、こうした「〔誰かの〕認識の〔他の誰かによる再〕認識」や「〔誰かの〕体験」の「表現」の「〔他の誰かによる〕理解」という考え方が、すでに対話的な他者の存在を暗に前提していることなのだが、まさにこのディルタイの問題意識こそが、やはり学的な認識理論の先験的条件の解明を目指していたフッサールの超越論的現象学における間主観性・他我構成の探求や、その弟子ハイデガーによる、周囲世界の他者や物とのかかわりのなかに定位する現存在の根源的な解釈学的性格の主張に多大な影響をあたえていることも、今日ではもはや哲学史的常識に属することに違いない。

またこうした文脈から見れば、バフチンが哲学者を自称しながら、もっぱら文献学や文芸の研究をその活動の場としたのもさほど奇異なこととは言えなくなるだろう。というのも、ディルタイが著名なゲーテ研究者であったことはもとより、その高弟であり解釈学的論理学も構想した哲学者ゲオルク・ミッシュは、むしろ浩瀚なヨーロッパ自伝史研究の著者として一般に知られ（ちなみにバフチンもこの著作を自身の小説論のなかで使っている）、ハイデガーもまた、ヘルダーリンについて数多くの論考を残しているのだから。

だが、このように考えてくると、じつは『バフチン、生涯を語る』のなかでバフチン自身がさかんにその影響を強調しているマールブルク派の新カント主義、とりわけヘルマン・コーエンと、バフチン自身の考え方との大きな隔たりもまた、無視できないものと考えざるをえなくなってくる。というのも、コーエンの基本的な考え方は、よく知られているように理論理性（意識主観）が対象（客体）をも産出するというものであり、そうだとすれば、世界内の私の意識でないものはすべて、他者も含めて私の意識経験の内側から産出されたものでしかなく、だとすると、ここには本当の意味での他者も対話もけっしてありえないからだ。もともとバフチンの「第一哲学」では、あらゆる理論的一般化は、それに超越論的に先立つ生の個別具体的で出来事的な他者との関係を前提としてはじめて可能となっているのであり、事実『美的活動における作者と主人公』のなかで彼は、コーエンの美学を、T・リップスやザント同様、他者のいない同質性の美学として手厳しく批判している。

こうしてみると、マールブルク派のコーエンやカッシーラーの文化哲学の影響をあまりに過大に見積もるB・プールやC・ブランディスト、V・マフリンらの研究では、バフチンの「第一哲学」にとって最も肝要な、文化現象の超越論的条件としての、「他者」との「対話」的關係という最も根源的な生の存在＝出来事の「現象学」的記述の問題が、あまりうまくすくいあげられていないように思える。むしろ、C・パーベなどが主張するように、直接の影響関係があまり明確でない中後期フッサールの他我経験論（『デカルト的省察』など）の方が、他者と私の身体と知覚の地平の相関関係を具体的に記述していて、『行為の哲学によせて』や『美的活動における作者と主人公』で展開される「内的身体」と「外的身体」、「内側からの視野」と「外側からの視野」との相関にかんする現象学的記述とのあいだにより多くの共通性を認めることができよう。

ただし哲学史的には、マールブルク派新カント主義は、じつは中後期フッサールの超越論的現象学と無関係ではない。マールブルク派でコーエンの盟友だった哲学者P・ナトルプは、初期フッサールにおける意識に与えられる経験の現象学的な静的記述の方法を批判して、対象を構成する意識作用そ

のものを捉えるべきと唱え、それに応じてフッサールは、意識による対象の構成作用を扱う中期以降の超越論的現象学へと舵を切ったと言われている。つまりフッサールの他者経験論は、じつは他者という対象を意識がどのように構成するのか、というコーエン的な対象産出理論とある意味で重なり合う部分を持つわけである。

コーエンにかんしては、もうひとつ興味深い符合がある。ヴァルター・ベンヤミンの出発点にもヘルマン・コーエンの哲学があったことはよく知られている。コーエンを博士論文で取りあげようとしたベンヤミンは、その主著『カントの経験理論』をもとに、新たな経験の理論を模索していたと言われている。清水一浩によれば、ベンヤミンが目指したのは、コーエンの産出理論をより純化して、経験から「直観」、「感覚」やその「主体」を徹底的に取り除くことだった。彼にとっては「意識や主体が認識の根源なのではなく」、「むしろ意識や主体の根源こそが問題」だったのである（「知覚するとは読むことである——知覚概念をめぐるカント、コーエン、ベンヤミン」）。一見するとそれは、他者と私の身体的な知覚経験の相互性から出発するバフチンとは対極にあるようにも思える。しかし清水によると、ベンヤミンでは、知覚や感覚のリアリティを産み出すのは、いわば物自体的な対象と我々の意識のあいだの、どれほど漸近しようとも非連続な断絶を移行することであり、それによって「意識（主体、感覚）」や「対象」がはじめてその姿をあらわす。しかもベンヤミンはこれを「知覚するとは読むことである」、つまり感覚的には直観されない対象を、間接的・言語的に読解・解釈することとして捉えているのだという。ベンヤミンとバフチンに数多くの相違点があるのはもちろんだが、それでも、このいわば解釈学的に転回された新カント主義とでも呼ぶべきもののなかに、対話的な相互輪郭化こそが「私」と「他者」の主体や人格を身体の様へと構成する、というバフチンの「第一哲学」のアイディアとの響き合いを感じとることもできるのかもしれない。

執筆者について——

貝澤哉(かいざわはじめ) 1963年生まれ。早稲田大学文学学術院教授。専攻＝ロシア文学。主な著書に、『再考 ロシア・フォルマリズム——言語・メディア・知覚』（共著、せりか書房、2012年）、『引き裂かれた祝祭 バフチン・ナボコフ・ロシア文化』（論創社、2008年）、主な訳書に、ナボコフ『偉業』（2016年）、『カメラ・オブスクーラ』（2011年、いずれも光文社）、レオニード・アンドレーエフ『印象主義運動』（1994年）、イーゴリ・ゴロムシトク『全体主義芸術』（2007年、いずれも水声社）などがある。

【特集 ミハイル・バフチン】

バフチンと日本近代哲学

—1920年代バフチンの行為の哲学と1930年代日本の哲学文化

佐々木 寛

わが国へのバフチンの移入が、世界に先駆けていち早くおこなわれた、その所以の一半について述べようと思います。

新時代社版の『ミハイル・バフチン著作集』全八巻が1988年春に完結したあと、同著作集に収められなかった1920年代前半の草稿「行為の哲学によせて」の抜粋要約を『現代思想』誌（1990年2月号）に載せました。今は水声社版の『全著作』第1巻で読むことのできるこの草稿でバフチンが論じていたのは、かいつまんで言うと、こういう問題でした。

- 1, 19世紀, 20世紀の近代哲学は, 理論的認識の対象となる世界を世界全体であるかのように主張しているが, 理論的な意識が構築した世界に, 現実の自己や自身の生をその要因として入れることはできない。
- 2, 現在もっとも要請されているのは, 具体的で歴史的に現実的な一定の行為, 志向し行為する意識をとりあげることができる哲学の世界を構築する試みである。現代の, 理論化された文化の世界と, 行為がなされる生の世界をつなぐ原理が存在しないのである。
- 3, 行為を, 外側から観照され, あるいは理論的に思考される事実としてではなく, 内側から, その責任においてとらえることが必要である。行為は, 意味と事実, 一般と個別, 現実と理想を, 単一で唯一の最終的なコンテキストにおいてむすびつけ, 関係づけ, 解決するのである。
- 4, わたしの唯一の位置からは, わたしにとってのわたしがわたしなので, 残りのすべてはわたしにとっての他者である。自分にとってのわたし, わたしにとっての他者, 他者にとってのわたし——現実の生と文化のすべての価値は, 行為の現実的世界をかたちづくるこれらの基本的な結構上の点のまわりに配置されている。
- 5, 現代の危機の根底にあるのは, 現代の行為の危機である。責任をもって遂行する力はすべて自律的な文化の領域(理論)に去ってしまい, この力から切りはなされた行為は, 初歩的な生物的, 経済的動機づけの段階にまで零落してしまっている。

さてそれで, そのあとに, 早稲田の古本屋街の店頭でたまたま三木清(1897-1945)の『哲学入門』を手にとって, 驚きました。その本はもともと, 西田哲学への入門書として昭和15年に書かれて, 岩波新書で出ていたものなのですが, その序論の部分で三木清は, バフチンが言っているのとまったく同じ問題を論じていたからです。少し長くなりますが引いておきます。

従来の主観・客観の概念においては, 主観は自我といわれ, これに対して客観は非我と呼ばれたが, 非我は他我即ち他の人間でなくて物の世界のことであった。そこでは主として自然的対象界が問題であり, 人間の世界, 歴史的・社会的現実が問題でなかった。我に対するのは汝でなく, 単なる物に過ぎなかった。しかるに単なる物に対する自己は真の自己であることができぬ, 我は汝に対して初めて我である。更に従来の主観・客観の概念においては, 自己は主観として存在で

なく、一切の存在は客観と見られる故に、自己は世界の中に入っていないことになる、世界は自己に対してあるもの即ち対象界と考えられ、自己はどこか世界の外にあるものの如く考えられている。かような主観は一個の抽象物であって現実の人間ではない。現実の人間はつねに世界の中にいるのである。我は世界の中にいて他に対しているのであるが、我に対するものは何よりも汝である。我は汝に対して我であり、汝なしには我は考えられない、そして汝は単なる客観でなく主体である。即ち主体は主体に対している。主観は客観に対して主観であるに反して、主体は根源的には客観に対してよりも他の主体に対して主体である。

(『三木清全集』第7巻、14-15 ページ、岩波書店。現代仮名遣いに改めた。)

主観・客観モデルでは、客観(対象)が世界の中にある、もの言わぬモノであるのに対して、主観は世界の外に抽象的に措定された点、誰がそこに立っても同じように対象が立ち現われる、置き換え可能な点であり、それは一個の意識とモノからなる、モノローグ的な世界モデルであるわけです。行為の哲学は、この主観を、世界の中で行為する主体に変える。行為の主体にとって、対象はもはや、もの言わぬモノではなく、なによりもまず課題に照らしての意味・価値として立ち現われるわけです(その背後には、別の主体がいる)。

我・汝関係というのは、自分にとってのわたし(内側から生きられたわたし)、他者にとってのわたし(外側から見られたわたし)、わたしにとっての他者という問題であって、それをバフチンは1920年代前半の草稿「美的活動における作者と主人公」で、主人公の生の能動性(内側から生きられたわたし)と作者の美的能動性(見る眼の余裕)の出会いがかたちづくる美的なできごととしての作品という観点に立って考察、そこから彼は、1929年の『ドストエフスキー論』初版以降の小説言語論へと転換してゆくわけです。

わたしはそのあと信州大学教養部のロシア語教員に採用されて、1991年10月に松本市に着任しました。そして95年3月下旬に、当時すでに絶版状態になっていた新時代社の『バフチン著作集』を新たに水声社から出そうという話が始まった、その直後の4月初めに、同市内縄手の古本屋で和辻哲郎(1889-1960)の『人間の学としての倫理学』を手にとって、再び驚きました。この本はもともと昭和9年に岩波全書として刊行されたもので、わたしが手にした一冊は昭和23年発行の第16刷、粗悪な紙に印刷されて紙焼けのした、読みづらい本でした。わたしが注目したのは、例えば次のような一節です。

間柄において汝・我れあるいは彼・我れなどとして働き合うとき、それが主観客観の対立に陥らず、汝はまた我れであり我れはまた汝の汝であるというごとき主体的連関があるゆえに、「我々」が成立する。あくまでも主観我の立場に立つものは「我れ」を「我々」とするためにきわめて困難なる他我の認識を解かなくてはならない。しかるに我々は物を考え出す以前にすでに我々である。人間としての実践的連関は、我れの意識の生ずる時すでに汝も彼もすべて我れであることをともに教える。

(『和辻哲郎全集』第9巻、139 ページ、岩波書店)

バフチンが1910年代半ばにペトログラード大学で哲学を学んだ時期の同大学哲学講座の様子については、水声社の『ミハイル・バフチン全著作』第1巻解説「バフチンと一九二〇年代前半のロシア」に記したとおりです。同講座の礎を築いたミハイル・ウラジスラヴレフ(1840-1890)は、1862年6月から二年余り、国費でドイツに派遣されて、カント学者クノー・フィッシャー(1824-1907)の下

で学びます。ウラジスラヴレフの弟子アレクサンドル・ヴヴェデンスキー(1856-1925)がクノー・フィッシャーの下で学ぶのは1885年から87年にかけての二年間で、そのあと1890年にヴヴェデンスキーは同講座の教員となり、ロシアにおけるカント学の第一人者となって、バフチンがその下で学ぶことになるわけです。

さてそれで、ウラジスラヴレフとヴヴェデンスキーのあいだにもう一人、クノー・フィッシャーの下で学んだロシア人の哲学者がいました。ラファエル・フォン・ケーベル(1848-1923)です。ケーベルは、枢密顧問官だったドイツ系ロシア人の父と、同じくドイツ系の血が濃い母のあいだに、ニジニノーヴゴロド(モスクワの東方400キロ、ヴォルガ河畔の古都)で生まれました。幼時に母親が亡くなり、ロシア皇帝妃の教育係をつとめた宮廷女官でピアノの名手だった母方の祖母に育てられて、1872年にモスクワ音楽院ピアノ科を優秀な成績で卒業。しかし人前で演奏することを嫌った彼は、翌73年にドイツに遊学。博物学を学んだのち、哲学に転じて、1875年頃にクノー・フィッシャーの門を叩き、81年にショーペンハウアーにかんする論文で学位を取得、85年頃からミュンヘンで暮らしたあと、E・ハルトマンの推薦で1893年に帝国大学文科大学の哲学教授として来日して、波多野精一、九鬼周造、和辻哲郎ほかの「ケーベルの十二弟子」と呼ばれる俊秀を育てて、日本近代哲学探求の礎を築きました。

西田幾多郎は文科大学の選科学生時代にケーベルの講義を一年間聴いているけれども、西田とケーベルのむすびつきは弱い。三木清とケーベルのつながりを言うのであれば、考えるべきなのは京都帝国大学時代のもう一人の師、波多野精一(1877-1950)でしょう(十二弟子のなかでケーベルが自分の弟子と認めていたのは、波多野一人であったよし)。先に引いた三木清と和辻哲郎の論述の背後にあるものを考えるとき、二人がそれぞれにドイツ留学で見聞・修得したもの、さらにその後の研鑽で積みかさねたものを抜きにして、人的なつながりだけで何かを語れるわけではありません。しかしそれでもやはり、ドイツの哲学を軸にした大枠の流れは共通だったわけで、1920年代のソビエト・ロシアと、少し遅れて1930年代の日本が、哲学モデルの転換という課題を共有していた事実には間違いはありません。

執筆者について――

佐々木寛(ささきひろし) 1949年生まれ。信州大学名誉教授。専攻＝ロシア文学、文学理論。小社刊行の主な訳書に、バフチン+ドゥヴァーキン『バフチン、生涯を語る』(2021年)、『ミハイル・バフチン全著作②フロイト主義／他』(共訳、2005年)、『ミハイル・バフチン全著作⑤小説における時間と時空間の諸形式／他』(共訳、2001年)、『ミハイル・バフチン全著作①行為の哲学によせて／他』(共訳、1999年)、などがある。

【特集 ミハイル・バフチン】

バフチン先生は何を学生たちに教えたのか

——対話理論と教育実践

田島充士

現代においては対話理論で名高いバフチンも、ソ連が政治的・経済的に混乱していた時期には、様々な職を転々としていた。中等学校で教鞭を執っていたこともあり、その時期の経験を基に書かれた教育実践に関する論文も残されている。本稿では、この教師としてのバフチンの実践思想について紹介したい。なお著者のこれまでの研究成果（田島, 2019, 2020, Tajima, 2021）をもとに、本稿を執筆した。

バフチンの議論の前提と話者の認識の異化

バフチンは、人々が唯一でかけがえのない自己意識を持ち、その独自の視点から外界を解釈するという前提から議論を行った。そもそもバフチンが独自の意味を込めて論じる「対話」とは、話者がそれぞれ独自の自己意識を維持しながら、相手の応答に応じて、自らの視点を変更していく知的柔軟性をともなうコミュニケーションを指す概念といえる。

しかし現実には、この話者らの自己意識の独自性を損なうような相互交流が展開されることも多い。例えば、親や教師・上司など社会的権威の指示に従って、無自覚に行動するようなコミュニケーションが想定される。また社会集団の慣習に従い、仲間同士で特殊なジャーゴンをあうんの呼吸で使用し、同じような世界観を形成して、自動的に物事を処理するようなやりとりも該当する。いずれも、話者が自分の頭で主体的に考えて独自の判断を下すという負荷をかけることなく、物事が解決するコミュニケーションである。

一方、バフチンは、話者が独自の思想を主体的に語り出すような有り様については、ロシア・フォルマリズムの用語を援用して、話者の認識の「異化」と呼んだ。例えば、同じ社会集団の仲間との間でジャーゴンを使用してきた話者が、外部の人間（バフチンはこのような部外者を「他者」と呼んだ）にその意味内容を説明するよう求められるとうろたえてしまうことは多い。このような場面において話者は、他者に向けた説明を行うため、自動的に使用してきたことばの意味や、そのことばに関わる世界観などについて熟考せざるを得なくなる。バフチンのいう異化とはこのように、話者の独自の視点からことばや世界観の意味を意識的に捉え直すという、他者との対話における現象を示す概念といえる。

異化を促進する悪漢・道化・愚者

しかし話者が既存の社会にとどまる限り、彼らの認識を異化することは容易ではない。同じ社会システムの中で、自動的に成立している交流が破綻しない限り、自分自身の頭で考える異化のような面倒事には関わらないというのもまた、人間の性であろう。

そこでバフチンが導入した概念装置が、「悪漢・道化・愚者」である。彼らはいずれも、社会の周辺部に住む他者であり、慣習化された世界観に対して無理解を示したり、自動的に承認された権威を批判してその虚像を暴いたりすることで、社会のあり方について人々に自律的な考察を迫るトリックスターといえる。その典型例は、伝統的に「賢き愚者」といわれてきた哲学者・ソクラテスである。

バフチンはこの愚者らを、思想的に同質な仲間とのやりとりで自己完結している人々に対し、異質

な視点からの批判を浴びせかけ、結果として人々に独自の自己意識を異化させる他者の典型として扱い、その存在の重要性を論じた。

悪漢教師・バフチン

以上のような議論を思想家として展開したバフチンは、1940年代に中等学校の教師として勤務しており、そこで学生たちの認識を異化するような実践を行っていた(Bakhtin, 2004)。

バフチンは、多くの学生たちが、教科書などに書かれた文学的なテキストなどを正確に書き写すような、ブッキッシュで決まり文句的な文章を書くことで満足しており、それらの文体に反するような、彼ら自身の生き生きとした経験やそれにともなう感情を、文章に反映しないと指摘した。これらの学生たちの多くにとって勉強とは、学校社会の中で、権威が課す公的課題に自動的に対応できるようになるための訓練であり、自分自身の実体験に根ざした自己意識を交えて深く考えるようなものではなかったということだろう。

そこでバフチンは、学生たちが書いたテキストを彼なりの視点から添削し、倒置法などの情動的・文学的な表現技法を駆使したテキストに変換して返すというアクションを起こした。そして学生らにそれらを、感情を込めて読み上げさせるという介入も行った。論文には書かれてはいないが、恐らくこの添削は、著者である学生たちが思ってもみなかったような調子をテキストにもたらしただろう。もしかすると、テキストの滑稽な改作なども行っていたのかもしれない。

その結果、多くの学生たちがこのバフチンによる添削に同意せず、生き生きとした興味深い議論が展開したのだという。その議論内容も残念ながら論文には書かれていないが、恐らく、バフチンや学生たちの間で、学生自身の意図について、自覚的な説明と弁明を行う対話が展開したのだろうと推測される。そしてこのような授業を受けた学生の多くが、独自の視点を活かした、生き生きとした感情を交えた表現を、学校で学んだ高度に文学的な文体を使用して実現できるようになったようである。

これは教師であるバフチン自身が、いわば悪漢となり、従来は既存の権威的価値観に従属することで満足していた学生の認識を異化させたものといえよう。さらにバフチンはこの介入において、自分の感情を相手に的確に伝えるという目的意識を持って、文学的なテキストを使いこなすことの大切さも伝え、実践させている。このような経験を通し、単に公的なテキストを暗記するのではなく、彼らが将来出会う異質な視点を持つ他者との間で、これらのテキストを自分なりに使いこなす、対話が行えるようになることの大切さを、バフチンは教えようとしていたのだろう。

現代におけるバフチン理論の教育実践への応用

現代においても、バフチンのこの対話理論を援用して教育プログラムを開発したり、その効果を評価したりする実践研究者は多い。著者もその一人として、公立小学校での研究授業の共同開発に携わっている。

その中で気づいたのは、やはり他者の存在が、子どもたちの学びへの姿勢を主体的にするという事実である。特に、学習成果を伝える宛先が教室外に住む他者（下級生、上級生、地域に住む人々など）であり、彼らが切実な問題を抱えていて、その問題解決を提案するような対話場面を設定することが有効である。解決困難な悩みを抱える他者は、子どもたちの話を鵜呑みにせず、思ってもいないような批判を投げかけてくる。この他者との対話を経験することで、子どもたちの認識が異化され、教材を自分自身の視点から解釈し直し、彼ら自身の感情も交えて、相手にも受け入れ可能な情報・表現を探る活動が促進されるようである。

このように、思ってもみないような異質な視点から批判を投げかける他者との対話経験は、バフチンと学生たちが展開したように、教科書などのテキストを、自分の意思や感情を伝えるための道具として駆使することを促進させる効果があると思われる。裏を返すならば、このような対話を志向する目的意識を子どもたちが失えば、容易に、暗記的学習に陥ってしまうのだろう。

*

無論、対話を教室に導入する授業だからといって、教師は自らのリーダーシップを放棄して、学習者にテキスト解釈の責任を押しつけるわけではない。むしろバフチンの論に従うならば、学習者が独自の自己意識をもって他者との対話を展開することの大切さを教え、またその対話の実現できるよう支援を行う点に、教師の高い権威性が発揮されるべきといえる。

実際には、実在する他者を教室に招待することは困難であるため、授業に他者の視点を持ち込むのは、多くの場合、教師となる。その意味では、教師はバフチンのように、学習者に異化をもたらす悪漢としての顔も持たなければならない。そして学習者に悪漢の抱く問題意識を紹介し、その視点から自分や仲間の学習成果を批評するロールプレイとしての対話を側面から支援することになる。

したがって教師には、教室集団をまとめ学習者に学習課題を遂行させる機能と、学習者の認識を異化して彼らの解釈活動を促進する機能の、両機能を兼ね備えたリーダーシップを発揮することが期待される。悪漢・道化・愚者の活躍するカーニバルをこよなく愛したバフチンの議論をイメージするならば、高い独自性を発揮する自己意識を抱えた悪漢同士が対話を行う舞台を組織する「興行師」であり、またその悪漢たちのモデルとなる「親方」でもあることが、この種の授業を運営する教師に求められるのかもしれない。

【引用文献】

Bakhtin, M.M. Stone, L.R. (Trans.) (2004) Dialogic origin and dialogic pedagogy of grammar: Stylistics in teaching Russian language in secondary school. *Journal of Russian and East European Psychology*, 42, 12-49.

田島充士（編）（2019）『ダイアログのことばとモノログのことば：ヤクビンスキー論から読み解くバフチンの対話理論』福村出版

田島充士（2020）『バフチン理論における詩と小説：ソクラテスのダイアログ論およびカーニバルにおける笑い論を中心とした視座として』『総合文化研究』23, 102-124.

Tajima, A. (2021) A sustainable consciousness promoting dialogue with alien others: Bakhtin's views on laughter and Euripides' tragi-comedy. *International Review of Theoretical Psychologies*, 1, 225-242.

執筆者について——

田島充士（たじまあつし） 1976年生まれ。東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授。公認心理師・学校心理士スーパーバイザー。主な著書に、『ダイアログのことばとモノログのことば——ヤクビンスキー論から読み解くバフチンの対話理論』（単編著、福村出版、2019年）、『「分かったつもり」のしくみを探る——バフチンおよびヴィゴツキー理論の観点から』（ナカニシヤ出版、2010年）などがある。

【特集 ミハイル・バフチン】

バフチンの〈対話主義〉の効用

桑野 隆

いまから4年ほど前のことだが、福祉労働関係の方と話を交わしていた折りに、「バフチンのいう対話について知りたがっている人が多いが、それは現場でどのように使えるものだろうか」とたずねられたことがある。そのときの話題は格差社会についてであり、それにからめてわたしのほうからバフチンの名をあげたわけではまったくなかった。意外外のこの問いかけに、わたしは返答に窮してしまった。

顧みるに、わたしが1970年頃にバフチンに惹かれるようになったのは、当時の日本の文化や社会にたいする批評装置としてであって、文学作品を解説するためではなかった。まだ邦訳のなかった『マルクス主義と言語哲学』について1972年に報告したのは「現代批評の会」(四方田犬彦『先生とわたし』新潮文庫を参照)においてであり、その後もバフチンについて「民衆文化研究会」その他の会で、専門や職業を異にする人たちを前にして報告してきた。多様な参加者がたがいに「引用」しあえるような関係を重視していたのである。1970年、80年代はそのような集まりが少なくなかった。

なかでも思いだされるのは、名編集長であり文化活動家でもあった久保覚さんが中心になって1986年に開催した国際会議「民衆文化運動フォーラム」の分科会のひとつが、「創造的対話と対話的創造を求めて」をテーマとしていたことである。その準備のための研究会でバフチンもとりあげられた。わたしの報告を聞いたアナキストの詩人・社会活動家、向井孝さんが、「なんだ、バフチンはおれと同じ考えじゃないか」と言ってくれたのは楽しかった。

だが時を経るうちに、種々の事情により、こうした類の集まりはしだいに減少していった。

おそらくそれがいちばんの理由であったろう。冒頭のような問いかけに即答する構えができていなかったのは……

そのことへの反省もあって、わたしはバフチンの著作をぼつぼつと読み返しはじめた。といってもそれは、バフチンの全体像を改めて検証しようというようなものではなく、今日の社会においてバフチンの対話論を活かすことはどこまで可能なのかという、ごく限られた視点からのものであった。

そのささやかな産物が、最近出版した『生きることとしてのダイアログ——バフチン対話思想のエッセンス』(岩波書店2021年9月刊)である。

サブタイトルにもあるようにバフチンの対話論の特徴をやさしく紹介するとともに、合わせて応用可能性をさぐったものである。当初はブックレットのような規模を念頭において書いていたのだが、最終的にはそれより少し長めの本になった。

その執筆過程でも再確認できたのだが、比較的早くからバフチンに関心を寄せていた教育学のみならず、昨今は精神医療やケア、異文化交流その他の分野においても、バフチンから示唆を得ようとする動きが目立ってきている。要するに、文学や文化を解説するための理論としてではなく、具体的な実践力、応用力に期待がかかっているのである。

たとえば、私が参加した教育心理学関係の学会でも、出席者から「他者とかかわることが苦手な生徒」とどのように接すべきか等の具体的な問いが出された。こうした問いに応答することは、テキスト解説の厳密さを競い合う「バフチン研究」の枠から逸脱しておりバフチンの「拡大解釈」であると

みなす者もあろうが、わたしとしては、こういう問いかけがなされる点にこそバフチンの対話論の豊かな可能性があるように思われる。

それともうひとつ執筆過程で再認識したのは、日本語で読める対話関係の著作がじつに多く出版されていることである。しかもそのほとんどが、わたしたちには対話の機会、あるいは対話力そのものが欠けており、それがゆえの問題点を指摘したり、対話力アップのレッスンを説いている。むろん、そのこと自体に問題があるわけではない。ただ、そうした対話観がバフチンのそれと大きく異なっていることは事実である。そのことが十分に理解されていないのか、あるいは理解されているがゆえにこそなのか、既成のほとんどの対話論にはバフチンが組みこまれていない。

*

以下では、拙著について少しだけ紹介させていただきたい。

まずカバーのイラストは、バフチンと愛猫を描いたものである。この猫は『バフチン、生涯を語る』においても、インタビュー中に一度ならず顔をだしている。大の猫好きのバフチンは、「猫と犬は、まったく異なる生き物である。猫は秘密を抱えているが、犬にはそれがない」と述べている。

さて本文の内容であるが、全体の三分の一ほどにあたる1～5章は、バフチン特有の〈対話主義〉の主要な特徴をまとめたものであり、以下のような目次になっている。

- 1 「わたしはひとりで生きている」という幻想
- 2 ひと永遠に未完であり、決定づけられない
- 3 ポリフォニー：自立した人格どうしの対等な対話
- 4 気をゆるめることなくむすびつきながらも、距離を保つ
- 5 応答がないことほど、おそろしいことはない

バフチンは、対話の必要性や意義を説いた数多の本と決定的にちがって、わたしたちが生きていること自体すでに対話をおこなっているということなのであるとかがえていた。

在るということは、対話的に交通するということなのである。対話がおわるとき、すべてはおわる。したがって、対話はじっさいにはおわることはありえないし、おわるべきでない。

生きるということは、対話に参加するということなのである。すなわち、問いかける、注目する、応答する、同意する等々といった具合である。こうした対話に、ひとは生涯にわたり全身全霊をもって参加している。すなわち、眼、唇、手、魂、精神、身体全体、行為でもって。

すなわち、ひとはもともと〈他者〉との相互関係のなかにあり対話しているのである。にもかかわらず、〈私〉という個がまず先に成立しているかのようにみなしがちなのは、支配的なイデオロギーがもたらした幻想、錯誤であるという。バフチンの〈対話主義〉からすれば、相互関係にある〈他者〉なしには〈自分〉も成立しえない。

この点ではバフチンの思想は、20世紀初頭に目立ったブーバーをはじめとする「対話の哲学」、あるいは後世のレヴィナス、サルトル、アレント等と基盤を共有しているのだが、そうした対話原理に

もとづいたうえで具体的にどのように論を展開していくかとなると、他の思想家たちとかなり異なっている。

そのひとつが、「ひとは永遠に未完であり、決定づけられない」という、対等で開かれた対話的關係の重視である。ひとをみずからが、ましてやほかのひとが「完結させてしまう」、決めつけてしまうなどということはあってはならない、という。

じつは、バフチンの代表的理論として知られるポリフォニー論も、第一のポイントはここにある。ポリフォニー小説では作者や登場人物たちの「自立しており融合していない複数の声や意識」がからまりあっていると同時に、「作者の意識は、ほかの他者の意識（つまり登場人物たちの意識）を客体と化すようなことはしておらず、それらの意識に当事者不在で完結させるような定義をくだしていない」。小説の作者といえども、登場人物を人格扱いせずキャラクター化する、すなわち決定づけるようなことは、〈対話主義〉と相容れないのである。

さらには、ひとが日常生活においてポリフォニック立場を保つためには、自分が〈他者〉の「外部に位置しているという余剰」を実り多いかたちで活かすとともに、「気をゆるめることなくむすびつきながらも、距離を保とうとする」〈対話的能動性〉が欠かせない。「愛」や「承認」、「許し」は、相手と一体化するのではなく、相手に見えていないものが自分には見えているという〈余剰〉を活かしてこそ可能なのであり、〈距離〉が重要である、とバフチンはいう。

また、対等な対話こそ自然な状態とかがえているバフチンからすれば、日常の会話における話し手と聞き手の関係も対等で、ともに能動的であり、場合によっては聞き手のほうがより能動的である。そもそも、話し手にとって「応答がないことほど、おそろしいことはない」。

こうした基本的原理に立脚してバフチンは、「意識」や「真理」、「ことば」もまた対話的關係のなかにあってはじめて成立していくものであることを説いている。「ひとりごと」ですら、バフチンからすれば「内的対話」である。

これほどにまで多様な現象を貫いている〈対話主義〉は類を見ない。問題は、これをどのようにして具体的な場で活用すべきかということになるだろうが、その点で最近きわだっている分野のひとつが〈オープンダイアログ〉という精神医療である。バフチンの〈対話主義〉がこれほど有効に実践されている分野もめずらしい。その委細はここでは省くが、〈オープンダイアログ〉の試みが、他の領域におけるバフチンの応用可能性をも再考させる貴重なモデルになっていることだけはまちがいない。

執筆者について――

桑野隆（くわのたかし） 1947年生まれ。元早稲田大学教授。専攻＝ロシア文化・思想。小社刊行の主な著書に、『危機の時代のポリフォニー――ベンヤミン、バフチン、メイエルホリド』（2009年）、主な訳書に、アンナ・ラーツィス『赤いナゲシコ――《職業革命家》アーシャの回想録』（2020年）、タチヤナ・コトヴィチ『ロシア・アヴァンギャルド小百科』（監訳、2008年）、シクロフスキイ他『レーニンの言語』（2005年）などがある。

ミハイル・バフチン著作集

責任編集=新谷敬三郎

〈全7巻+別巻, ★は近刊〉

- 第1巻 行為の哲学によせて／美的活動における作者と主人公／他 伊東一郎・佐々木寛訳 6500円
第2巻 フロイト主義／文芸学の形式的方法／他 磯谷孝・佐々木寛訳 7000円
第3巻 マルクス主義と言語の哲学／他 野中進・斎藤俊雄・北岡誠司・佐々木寛・武田昭文訳★
第4巻 小説の言葉／他 新谷敬三郎・伊東一郎・国松夏紀・佐々木寛訳★
第5巻 小説における時間と時空間の諸形式／他 伊東一郎・北岡誠司・佐々木寛・杉里直人・塚本善也訳 6500円
第6巻 ドストエフスキイ論 新谷敬三郎・伊東一郎訳★
第7巻 フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化 杉里直人訳 10000円
別巻 書簡・資料集, バフチン論集★

*

バフチン, 生涯を語る ミハイル・バフチン+ヴィクトル・ドゥヴァーキン／佐々木寛訳 4000円
危機の時代のポリフォニー——ベンヤミン, バフチン, メイエルホリド 桑野隆 3000円

[価格は税別]

【追悼 ジャン＝リュック・ナンシー】
微笑みを差し出しつつ……

小林康夫

墓標を立てなければならない。

2021年8月23日 ジャン＝リュック・ナンシーの死（81歳）

昨年、水声社から刊行させてもらった「煉獄のフランス現代哲学」全2巻は、1980年前後から2000年くらいのあいだに「フランス現代哲学」とどのように出会ったのか、そのドキュメント集であったのだが、「煉獄」というタイトルが暗示しているように、編集執筆しているわたしにとっては、嗚呼、ひとつの時代が終っていく！という愛惜の感慨止み難く、それゆえに、——いまから思えば、なんと不吉なこと！と思わないでもないのだが——そこで取り上げた、わたしに親しかった人たちのそれぞれに、まるで「墓標」のような命日の記標を立ててしまった。

だが、そのなかで、ジャン＝リュックだけは、「元気で本年80歳を迎えている」と書きつけることができた。そして「元気で」と言えるのは、去年ということになるが、その年の7月にメールを交換しているからだとエピソードを打ち明けた。1980年の夏のスリジー・ラ・サルのデリダをめぐるコロックの集合写真にデリダの姿だけが見えないことを訝しく思って悩んでいたのだが、そうだ、このコロックの主催者であったジャン＝リュックに聞くのがいちばん早くて確実だ、とかれにメールしたのだった。普段からメールをやりとりする関係ではない。だが、こちらが思いあまったときには、かならずきちんと受けとめてもらえるということを、わたしは知っていた。本来、「悪」についての国際哲学コロックがパリで開催されることになっていて、「その場で会えるはずだったのに、コロナ禍のせいで中止になったことが残念」と前置きしながら、問い合わせのメールを送った。すると即刻、翌日7月6日、「康夫、あなたからメールもらえるなんて嬉しいね。その写真持っていないから、スキャンして送ってこないかな。謎を晴らしてあげるから。友情をこめて」と返信が来る。すぐにそうすると、翌7月7日にメールが来て、「ありがとう。わかった。この写真は1982年のリオタールのコロックの写真だよ。この集合写真のときには、デリダはもういなかった。すぐに帰ってしまったから。あなたは1980年にもスリジー・ラ・サルにいたよね。そちらの写真もあるんじゃないかな。わたしも写真もっているはずだけど、箱のなかで、コンピュータのなかから探すのと比べると厄介で……友情をこめて」と。結局は、わたしが間抜けだったというだけのオチなのだが、わたしもすぐに感謝のメールを返して、「あの1980年のデリダのコロックは、わたしの人生のなかでもユニークな出来事で、わたしはその後、ずっとあの出来事に忠実に生きたのだと思います」と書いたのだが、ジャン＝リュックからすぐに2行の返信が来て、「ほんとうに、あのモーメントは強烈だったよね！」と。

1年前の七夕前後のわずか三つのきわめて断片的なメール。わたしの思い違いが訂正されたというだけ。取り立てて語るべきいかなる「意味」もない。

しかし、それだからこそ……そこに、なにか「意味なし」の、「作品なし」の、無為の、無力の……——（共同体 *communauté* という言葉は嫌だな）——共同体を形成することのない、それでも「ともにある」こと、ただ集まっているという意味ではなく、集まっているわけではないのに「かすかに

触れあっている」, 遠い, しかしリスペクトに貫かれた「友情」が, まさに彗星 comète のように走り抜けた, と言いたただけである。

*

「煉獄のフランス現代哲学」の下巻『死の秘密, 《希望》の火』151頁には, 少し斜行するとても小さな字で書かれたフランス語の手紙のコピーが載っている。それはジャン＝リュックの筆跡で1980年のこと。当時, 留学生だったわたしが, ジャン＝リュックとフィリップ・ラクー＝ラバルトの二人が設立した「政治的なものについての哲学研究センター」について, ある種の挑発的な問いかけを送った書簡に対する回答だ。わたしの問いは, かれらの言説のなかにあった la vigilance (用心/警戒) という言葉に対する「居心地の悪さ」から出発したものだったが, そこには, かれらが当然のように考えている「西欧的な地平」へのある種の違和を, 「東」から来た人間として, どうしても訴えておきたいという思いがあった。おそらく, わたしにとっては「師」であったデリダやリオタールには, そのような直接的な「態度」はとれなかった。だが, ジャン＝リュックとフィリップは, 「師」ではなく, 10歳ほど年が離れているのだが, 日本流に言えば, 「先輩」のようなところがあって, ストレートに思いをぶつけやすかったのだと思う。

わたしのそのような「態度」は, その後も一貫して変わらず, たとえば『水声通信』第10号(2006年)に収録されている, 東京大学駒場キャンパスで行われたジャン＝リュックの講演と続くターブル・ロンド「無-無神論」においては, 登壇者のなかでただひとり, わたしはジャン＝リュックの哲学そのものを問うのではなく, キリスト教をベースにしたかれの「無-無神論」に対して, 佛教をベースにしたわたしの「無-無神論」をぶつけるという「態度」をとった。つまり, 佛教こそが根源的に「無-無神論」的であるのではないか, という挑発である。当然, 議論はすれ違い, 二人で「それならわたしもなにも言わず, 微笑むだけにしましょう」などとやり合う一幕もあったのだが, わたしにとっては, ジャン＝リュックという人は, なによりもそういうことができる「先輩」のひとりであったのだ。

そう, わたしは微笑む。ジャン＝リュック, あなたが立ち去ったあとの「空白」に微笑む。ささやかな空白にささやかな微笑みを差し出しつつ……ささやいてみようか, 無は無い, と。

執筆者について――

小林康夫(こばやしやすお) 1950年生まれ。東京大学名誉教授。専攻＝哲学, フランス文学。小社刊行の主な著書には, 『不可能なものへの権利』(1988年), 『《人間》への過激な問いかけ――煉獄のフランス現代哲学(上)』(2020年), 『死の秘密, 《希望》の火――煉獄のフランス現代哲学(下)』(2021年), 主な訳書には, ジャン＝フランソワ・リオタール『ポスト・モダンの条件』(1989年), 主宰する雑誌には, 『午前四時のブルー』(責任編集)などがある。

【追悼 ジャン＝リュック・ナンシー】
だれであれ「共に」

安原伸一郎

私はジャン＝リュック・ナンシーの良き読者ではない。彼の数多くの著作のごく一部しか読んでいないし、そもそも正確に読めているのか、はなはだ心もとない。しかしながら、そんな私にとってもナンシーの訃報は衝撃であり、とても寂しいものである。

非力な私には、ナンシーの書物は難解だ(でも難解でない書物などあるだろうか)。その難しさは、議論の背景になっている膨大な哲学を知らなければ理解できないという難解さであり、ときにフランス語を柔軟に用いて遂行的な文体で展開されていく厳密な思想の晦渋さであると同時に、実のところ、ナンシーがしばしば特定の時代の文脈のなかで発言していたことに起因するものでもあるように思われる。

たとえば、「現代世界に関する証言のうち最も重要で最も苦痛に満ちたもの、[……] とにかくこの時代が果たすべきものとして負わされたさまざまな証言のうちで、おそらく他のいっさいを包括しているもの、それは共同体の崩壊、解体、あるいはその焚滅をめぐる証言である」という文言で始まる「無為の共同体」は当初、論文として1983年に発表されたが、それはしかし、コミュニズム(共産主義)やコミュノテ(共同体)という言葉をも、まずもって国家や政治の文脈から引き剥がし、ジョルジュ・バタイユを導きの糸にしつつ、人の根本的な在り方として検討し直す試みだった。

その「無為の共同体」に見られる「無為」は、ナンシー自身が認めているようにモーリス・ブランショに由来する言葉であり、すでに「無為」の彼方へと歩を進めていたブランショ自身はナンシーに対して留保を示す一方で、ナンシーは次第に「共に」という考えに力点を置くようになるわけだが、それでも、「無為の共同体」という思想は、有用性だとか生産性だとかいった言葉が喧しく交わされるこの世界にあって、初出時の時代状況を越えて、ますます重要なものになっているように思われる。

なぜなら、「共同体は特異存在たちの作品ではないし、それらが共同体の作品なのでもない」と記したナンシーは、畢竟するに、人が人である以上はつねにすでに「分有」されて生まれ死にゆくことを論じたからである。人は個として何者かである前に、まずもって「共に」の次元で存在している。そこに示されているのは言うなれば、——だれであろうと否応なしにおのれの死を一人で完了することさえできないという根本的な事態を解明し、逆説的ながらも肯定的に確認することによって、何らかの大義に包摂してしまうことなくあらゆる人を掬い取ろうとする身振りにほかならないだろう。

相模原事件が起こるようなこのクニにおいて、これほど大切な認識はあるまい。この点にも(むしろこの点に限らないが)、ナンシーの変ることのない一つの今日性が存しているのだろうし、だからこそ、良き読者ではない私にとってさえ、彼の訃報は寂寥の念を抱かせる。謹んでご冥福をお祈りしたい。

執筆者について——

安原伸一郎(やすはらしんいちろう) 1972年生まれ。現在、日本大学商学部准教授。専攻＝フランス文学。主な訳書には、モーリス・ブランショ『問われる知識人』(月曜社、2002年)、ジャン＝リュック・ナンシー『無為の共同体』(共訳、以文社、2001年)、[『モーリス・ブランショ 政治的パッション』](#)(水声社、2020年)などがある。

【追悼 ジャン＝リュック・ナンシー】

透明な点

伊藤潤一郎

この半年ほどのあいだに、まず『アイデンティティ——断片、率直さ』（水声社）、つづいて『あまりに人間的なウイルス——COVID-19の哲学』（勁草書房）と、ナンシーの著作を2冊立て続けに翻訳する機会に恵まれた。期せずして、どちらも状況への介入を強くしつづけるテキストを訳したことになる。前者は2009年にフランスで巻き起こったナショナル・アイデンティティをめぐる論争に、後者は言うまでもなく目下のコロナ禍に関するものだ。たしかに、サルトルの「シチュアション」やバディウの「シルコンスタンス」に比べれば目立たないかもしれないが、ナンシーもまた状況との緊張関係のなかで思考する哲学者のひとりだった。『無為の共同体』の冒頭を読めば誰の目にも明らかのように、1980年代から展開されてきたその独自の共同体論は、現実の「共産主義」の動向を抜きにしては考えられない。

むろん、哲学者が政治や社会状況を論じること自体はとりたてて珍しいことではない。ここ1年半ほどの新型コロナウイルスをめぐる言説をみても、世界の哲学者たちはきわめて饒舌であり、ナンシーのみならずアガンベンやジジェクのコロナ論がすでに日本語に訳されている。しかし、そうした哲学者たちの議論を例外状態や外出禁止への賛否によって立場分けするとしたら、それにどれほどの意味があるだろうか。アガンベンは例外化措置による自由の制限を批判したのに対し、ナンシーは心臓移植手術時の思い出でもってアガンベンのまちがいを揶揄したというような理解は、あまりに表面的すぎるのではないか。その程度の議論であれば、哲学者でなくともできるにちがいない。

結局のところ、哲学者が時局について論じたテキストで問われているのは、表面的な状況をとおして見えてくる別の次元なのである。それは、状況を離れては論じえないが、表面的な状況にのみとまるのでもないような何らかのものである。ここではそれを、アリストテレスにならって「透明なもの」と言っておこう。

私が「透明なもの」と呼ぶのは見られうるものではあるが、しかし無条件的な意味で「それ自体として見られうる」というのではなく、他の外在的な色のおかげで見られうるということの意味する。
(『魂について』中畑正志訳, 418b)

透明なガラスが、その向こうにある空の青さとともにしか見えないうように、「透明なもの」は個々の色をもったものをおしてしか見ることができない。つまり、「透明なもの」はそれ自体として見ることはできず、具体的な色を介して透かし見ることしかできない。しかし逆に言えば、個々の色を見るとき、私たちはつねに「透明なもの」も同時に見ているのである（空気を考えてみればよい）。たとえ、そのものとしてありありと見ることはできないとしても、視覚から「透明なもの」が切り離されることは原理的にありえない。哲学者たちの時評が個々の状況をとおして語ろうとしているのは、このような不可視でありながら状況を取り巻く「透明なもの」ではないだろうか。にもかかわらず、ひとは往々にして状況のなかにはまり込み、「透明なもの」など存在しないかのように振る舞ってしまう。ナンシーが「あまりに人間的な」という措辞によってこの間批判してきたのは、まさにこ

うした「透明なもの」を見ようとしないう人間のあり方にほかならない。

『アイデンティティ』と『あまりに人間的なウイルス』をあわせて読むとわかるように、ナンシーにとって「透明なもの」とは何よりもまず「点」である。あたりまえのことだが、この物理的世界に「点」は存在しない。ペン先がノートに触れてできたインクの染みも、数学の時間に黒板に記されたチョークの跡も、この世界で「点」のように見えるものはすべて広がりをもった「面」である。「次元をもたない」という定義上、「点」は延長実体の世界には場をもちえない。それにもかかわらず、人間の精神は実際には「面」であるものとおして「点」を見ることができてしまう。「面」の世界には居場所がないはずの「点」という過剰なものを、人間は透かし見ることができるのだ。これは非常に驚くべきことである。しかし、このような「点」が純粹に観念的なものではないことに注意しなければならない。「透明なもの」が個々の色をとおしてのみ現れるように、「点」は「面」の世界を介してはじめて現れる。ナンシーの時評が問うていたのは、まさにこうした具体的な色をもった「面」の世界と「点」の関係だった。

アイデンティティとは、そこから軌道が出発する落下点——書き込みの点でもよい——なのである。
(『アイデンティティ』, 71 頁)

問われているのは、現在の状況を明らかにし、点を生み出すことだけである。まさにそれは次元なき点であり、転換点、反転する点、革命の点である。(『あまりに人間的なウイルス』, 92 頁)

点を状況のなかに生み出すこと。それは、点が状況のなかにあるべき場所をもたない以上、状況に対して過剰で余計なものを生み出す行為となる。ゆえに、点はつねに「革命の点」なのだ。ナショナル・アイデンティティの画定によって移民の排斥を進めようとする政治的企てや、グローバルな技術-経済権力が跋扈する現状を転換し、その方向を変えるための点を生み出すことは、「書き込みの点」とも言われているように、まずは書くことによって遂行される。生前最後の著作『マクロンのマスカロン』(2021年)に至るまで、ナンシーが生涯に著した膨大な数のテキストが、この哲学者にとって書くことがいかに重要であったかを端的に物語っている。

とはいえ、より重要なのは精神なのだと言えるかもしれない。コロナ論のそこかしこに見られる「精神=息(esprit)」への言及は、計算や情報に終始しない「別の精神」を求めてのことだった。計算であれ情報であれ、それらは点を透かし見ることがない。面について情報を集め、いくら計算をしたところで、それは点を見ることにはならないし、個別の色について情報収集し、その特性を計測したところで、透明なものにはけっして到達しえないのである。こうした精神のあり方は、面をとおして点を見るような精神の働きを明らかに裏切っている。面しか見ない精神とは、特異な透明なものを抹消し、見ることの開けを否認する窒息した精神でしかない。それに対し、ナンシーが探究した「別の精神」とは、面に対して過剰な点を面のうちに見る精神であり、まさにそのような透明な点を生み出す精神なのである。こうした精神を私たち一人ひとりが生きる状況のなかで息吹かせることこそ、哲学者の精神にもっとも忠実であることだろう。

執筆者について——

伊藤潤一郎（いとうじゅんいちろう） 1989年、千葉県に生まれる。現在、日本学術振興会特別研究員PD。専攻＝フランス哲学，キリスト教思想。主な翻訳には，ミカエル・フッセル『世界の終わりの後で——黙示録的理性批判』（共訳，法政大学出版局，2020年），ジャン＝リュック・ナンシー『[アイデンティティ——断片，率直さ](#)』（水声社，2021年），『あまりに人間的なウイルス——COVID-19の哲学』（勁草書房，2021年）などがある。

ジャン＝リュック・ナンシーの本

モーリス・ブランショ——政治的パッション ジャン＝リュック・ナンシー／安原伸一郎訳 2000 円

アイデンティティ——断片，率直さ ジャン＝リュック・ナンシー／伊藤潤一郎訳 2000 円

*

水声通信 10 号 [特集 ジャン＝リュック・ナンシー] 1000 円

死の秘密，《希望》の火——煉獄のフランス現代哲学（下） 小林康夫 3800 円

[価格は税別]

【追悼 立花英裕】

あまりにも早い、その旅立ちに寄せて

中村隆之

こんなにも早く偲ぶ日が訪れるとは予想だにしていなかった。私だけではない。故人を知る誰しものが。本人もそうだったはずだ。先生がご病気になられてからというもの、パンデミックも重なってこれまで続けてきた読書会も対面で実施するのが叶わなくなり、困惑のなかでZoomを利用してオンラインで再開した読書会を10カ月ほど続けた矢先のことだった。私が画面越しに最後にお会いしたのは2021年8月10日（火）のことであり、それから2週間ほど先の8月27日（金）が次回の読書会の予定日だった。いつものように、その日に再会できるだろうと思っていた……。

8月17日（火）の晩、自宅の机に向かっていると、見知らぬ番号からの電話を受け取った。開口一番の挨拶で電話越しの声が先生ではなく、先生のお嬢さんであることを知った。伝えられるべき内容を即座に予期した。前日の晩、先生が息を引き取った、という訃報だった。72歳。早稲田大学をご定年で退職されてわずか2年後のことである。ご家族の悲しみを思えば、狼狽えるわけにもいかず、こんな言葉が口をついて出た。覚悟していました、と。

2019年秋、先生は突如倒れて長い入院生活に入った。白血病の一種で、白血球が増殖していくのだが、完治不能であるため、増殖を抑制する化学療法で対処するしかない、といただいたお電話でうかがった。お見舞いに行ったのは同年12月下旬。この頃は病態が危ぶまれた時期だったが、その後、幸運なことに適切な治療法によって病状が著しく改善し、以後、入退院を繰り返しながらも、多くは画面越しとはいえ、お会いするときには比較のお元気な姿だった。

読書会を再開したのは2020年10月のことである。再開にあたり、メンバーは当然、先生のお身体の具合を心配したが、病人扱いはしないしてほしい、とおっしゃったことが強く印象に残っている。アフリカのフランス語作家レオノラ・ミアノの評論を題材にしたその読書会で（この時期の読書会には毎回12、3名が集い、各分野でご活躍の方が多い）、私が担当した第1章を読み終えた頃だったこともあり、先生に第2章をご担当くださるよう打診したところ、快くお引き受けくださった。そのようなわけで、この10カ月ほどの読書会の間、立花先生とのかけがえのない時間を共有することができた。

ある時、先生から嬉しいお電話をいただいた。2021年5月21日（金）開催予定のフランス大使館での受勲式に出席できるかどうか、という打診だった。そのときは声の張りから、お元気であるのが伝わってきた。やや驚いたのは、受勲式のあとに食事会を開けるとするか、と相談を受けたことだ。正直なところ、この感染拡大の状況下では受勲式の開催そのものが危ぶまれると思っていたので、咄嗟に「難しいと思います」と答えてしまったが、そのやりとりのときだったか、先生が「ミアノ輪読会」（私たちはそう呼んでいた）が自分にとって生き甲斐になっており、病室から世界に開かれた窓のようなものだとおっしゃっていたことを、私は忘れることができない。

何よりも忘れがたいのはその声だ。私たちはパンデミックによって身体を介したコミュニケーションの場を失って久しいけれども、幸いなことに、声の存在感だけは失わずにいる。たとえばデジタルに変換・再現される間接的な声であるにしても、この10カ月間、フランス語と日本語の双方で定期的な聞いてきた先生の声——笑顔と笑い声がよく似合う、やさしく、ゆったりと発せられる、明るいつーンその声を思い出すと、寂しくもあるが、嬉しくもある。

8月22日(日)が最後のお別れの日となった。感染症対策のため、基本的には身内のみの告別式
の場に加えていただいた。先生はエメ・セゼールの『帰郷ノート』の原書を携えて穏やかなご様子で
旅立たれた……。

私たちにはやるべきことがたくさん残されている。そもそも、まだ旅立つおつもりもなかった先生
には未完となったお仕事がある。『クレオール(Creole)の想像力』(水声社, 2020年3月)を刊行して現役時
代に一区切りをつけた先生のお仕事は、まさにこれからだった。私には、何よりも、読書会の友人た
ちと一緒にレオノラ・ミアノの評論集を形にする仕事が託されている。

瑞々しく、開かれた精神の持ち主だった先生は、フランス語圏のアフリカ文学の現在形にまで、関
心を持たれていた。現代アフリカ文学を紹介する翻訳の仕事も、アフリカ・カリブのフランス語圏文
学を研究する仲間たちとともに、おこなっていききたい。ケベック方面の仕事は、きっとどなたかが引
き継いでくださるだろう。

その人の不在によってますます大きくなる存在感とは、いまこの世にいる人たちに与えてきた影響
力の大きさを示している。立花先生は人付き合いがよく、電話が好きで、フランス語圏の研究者たち
との交流を欠かさない、コスモポリタンな方だった。先生とはフランス、マルティニック、セネガル
といったフランス語圏でもご一緒してきた。過去のなかに先生の面影を探すと、さまざまな思い出の
断片がとめどなく溢れてくる。

その人が誰であったのかを問うのは、その人ではない誰かだ。その人のことを思い出すのもまた。
立花先生のことを語り合える場を、いつか、みなさんと持ちたいと思っている。

執筆者について――

中村隆之(なかむらたかゆき) 1975年生まれ。現在、早稲田大学准教授。専攻=フランス語圏文学。主な
著書には、『エドゥアール・グリッサン』(岩波書店, 2016年), 『野蛮の言説』(春陽堂書店, 2020年), 小社
刊の主な訳書には, J・M・G・ル・クレジオ『氷山へ』(2015年), エドゥアール・グリッサン『[痕跡](#)』(2016
年)などがある。

【追悼 高橋透】

サイボーグの心を追い求めた哲学者

坂内 太

早稲田大学文学学術院でユニークなサイボーグ論を展開していた高橋透氏から電話を頂き、医師たちに余命1年と宣告されたことを知らされたのが今年の3月末だった。コロナ禍中での筆者と家族の健康を案じてくださる声には、不思議なほど静かな落ち着きと温かさが感じられた。突然の訃報に接したのは、そのわずか3カ月後である。勇敢に立ち向かわれていたご病気の重篤さに絶句した。四十九日法要をご家族だけでお済ませになったというご連絡を頂戴した後、高橋透氏とお父様の哲学者高橋允昭氏の菩提寺にご挨拶に伺った。鎌倉方面を見渡す高台に設置された墓石の一部には、ニーチェの著作にちなんでアポロとディオニュソスの二語が刻まれていた。

高橋透氏は、「我と汝は異なる存在」なのであり、「人は必ず死ぬ」のであるという、誰もが当然だと思ふような考えに対して疑問を深めていった。テクノロジーの進展によって「他者との融合」や「不死」が人間の行く手に臙気な姿を見せ始め、自他の境界と死の領域が少しずつ浸食されていく状況を俯瞰し、分析し続けてきた。太古からの人間の生存戦略としての可塑性のポテンシャルを信じ、人工知能（AI）が人間の知能を超える転換点（シンギュラリティ）を視野に入れつつ、人間がAIと積極的な融合を果たして根本的な在り方を変えていく未来の可能性を哲学的に探り続けてもいた。また、様々な芸術作品に描かれた、そうしたポスト・ヒューマンの表象に、人類が日増しに強める未来への予感や変革の予兆を感じ取っていた。2006年に『サイボーグ・エシックス』（水声社）を刊行した頃からは、絶えず、ニーチェやデリダの思想をサイボーグ理論に結んで現在の意義を見出そうとしてきた。

大学教員としての高橋透氏は、人間の可塑性を例証するかのよう研究分野を広げていった。2007年に再編された早稲田大学の新学部で身体論プログラムを立ち上げると、西洋哲学の知見を基礎に、汎用人工知能論や貨幣論を展開し、映画、漫画、アニメを論じ、バイオ・ポリティクスや他者性を巡る議論の現在を講じた。サイボーグ技術の最先端を俯瞰する講義や演習には大きなインパクトがあり、多くの受講生を集めた。

あと20年ほどで到来するとも言われるシンギュラリティに高橋氏が立ち会われていたら、どのような観察をなさるだろうか、と思わざるを得ない。時代を先取りしていた高橋氏にとっては、自らのサイボーグ化が現実に関わらなかったというよりも、長年に渡って少しずつ自分に迫り来る死の影を感じつつ、サイボーグの思想を磨き上げてきたというべきかもしれない。氏は入院後も病床のベッドに固定したパソコンで思索の成果を書き続けていた。本年7月4日、くしくもご自身の奥様の誕生日に、デリダの思想を量子力学に接続する研究ノートを書き上げ、その3日後の七夕の日に、高橋透氏は他界した。自明視された概念を疑問視して新たな知の地平を開拓する、研究者の模範のような方だった。心からご冥福をお祈り申し上げたい。

執筆者について――

坂内太（さかうちふとし） 1965年生まれ。現在、早稲田大学文学学術院教授。専攻、アイルランド文学、演劇論、身体表象論。小社刊行の訳書には、デクラン・カイバード『「ユリシーズ」と我ら――日常生活の芸術』（2011年）、『アイルランドの創出――現代国家の文学』（2018年）などがある。

【連載】

グラシリアノ・ハーモス『乾いた人びと』について

—Books in Progress 12

村山修亮

今月の Books in Progress は、来年2月に刊行を予定している [《ブラジル現代文学コレクション》](#) シリーズの1冊、グラシリアノ・ハーモス (Graciliano Ramos, 1892-1953) の代表作『乾いた人びと』 (*Vidas Secas*, 1938. 高橋都彦訳) について、ご紹介したいと思います。本シリーズから刊行されている『老練な船乗りたち』のジョルジ・アマードと同じく、ハーモスは一般的には北東部の地方主義作家として分類されますが、アマードとは対照的に非常に寡作なことで知られています。発表した小説は4作品にとどまり、邦訳も『現代ラテン・アメリカ短篇選集』(河村昌造訳, 白水社, 1972年)におさめられた「泥棒」があるのみで、本国の評価に比して日本での知名度は決して高いとはいえません。しかしながら、ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス監督の映画『乾いた人生』の原作と聞けば、少なからず思い当たる方がいらっしゃるのではないのでしょうか。焼けつくような日差しと荒廃した大地のなかを彷徨するファビアノ一家が、簡素ながらも美しいショットにおさめられ、ブラジル北東部の社会状況を鋭く描き出したシネマ・ノーヴォの傑作として知られる本作ですが、小説に触れてみれば、苦悩をことばにすることができない登場人物たちの心理と運命とがよりいっそう巧みに浮かび上がり、ハーモスの文体の到達点を堪能することができる味わい深い作品になっています。

グラシリアノ・ハーモスは、ブラジル北東部のアラゴアス州生まれ。遅咲きの作家で、商店の経営者や市長をつとめた後、41にして処女作『カエテー族』を刊行し文壇に迎えられました。この3年後、彼は共産主義者とみなされ逮捕されることとなりますが、言わずもがな時はヴァルガス政権下であり、以後の彼の作品は、ブラジルという現実の社会状況を抜きにして考えることはできないものになってゆきます。本書もまた、封建制が色濃く残る、資本主義的改革から取り残された北東部のセルトンで、度重なる干魃により土地を追われ、搾取に喘ぐ牛飼一家の流浪の生活が描かれています。彼らにはどのような「乾き」があり、果たしてそれは癒されることがあるのか、ぜひ本書をお読みいただければ幸いです。また、高橋先生によれば、ハーモスは本作ではじめて三人称の視点を採用したようです。映画でもひととき存在感を放っていた「牝犬パレイア」に捧げられた章は、ふんだんに自由間接話法が取り入れられることで声無き存在の声が地の文から溢れ出す構造になっていて、汲み尽くすことのできない魅力に溢れています。

2022年、ブラジルは独立200周年を迎えます。本書のほかにも現代ブラジル文学の翻訳企画を鋭意、準備中です。今後のラインナップにご期待ください。

執筆者について—

村山修亮 (むらやましゅうすけ) 1991年生まれ。水声社編集部所属。

【連載】

『赤毛のアン』から『更級日記』へ

——裸足で散歩 14

西澤栄美子

「卑怯な、いやな奴！ よくもそんなまねをしたわね！」とアンは激しくなじた。そして——バシんと自分の石盤をギルバートの頭にうちおろして砕いてしまった——頭ではない、石盤を真っ二つにしたのである⁽¹⁾。

主人公、アンの赤い髪（外見）をからかった男子ギルバートに、アンが、この時代の学校でノートとして使われていた石盤をうちおろした場面です。『挑発する少女小説』⁽²⁾の『赤毛のアン』についての章で、「この小説の白眉は、まちがいなくこの場面でしょう」と、著者斎藤美奈子⁽³⁾は述べています。斎藤がこの本で取り上げているのは、19世紀から20世紀半ばまでの、9編の海外少女小説であり、リアリズム（魔法使いの登場しない）児童文学です⁽⁴⁾。

それぞれ世界的ベストセラーであり、『ふたりのロッチェ』を除いて作者は全員女性であり、読者のほとんどは女性です。これらの少女小説は150年前から、最も新しいものでも70年以上前に書かれたにもかかわらず、現在でも何度も版を重ねており、映画化、アニメ化もされるほどのロングセラーです。斎藤によれば、これらはもともと19世紀から書かれ始めた女子教育のための、将来の望ましい女性像、すなわち性別による役割分業を肯定する「家庭小説」に分類されるものでした。背景には産業革命と、それによるホワイトカラーの増加、性的役割分業の定着、鉄道の発達、学校の整備による男女共の識字率の上昇、メディアの発達があります。ところが、おそらく無数に書かれたはずの「家庭小説」の中で、ベスト・ロングセラーとなっているこれら9編は、すべてが性的役割分業を拒否、あるいは脱構築しています。主人公の少女たちは皆、「わきまえない女」なのです。

詳しくは軽妙な語り口で、読み物としても大変面白い本書『挑発する少女小説』を読んでいただきたいのですが、筆者は、特に、大人の目には見えない絶望を抱え込む少女たち、その両親、元少女たち、さらにこれらの小説を1冊も読んだことのない男性に本書を読んでほしいと思います。

そしてこれらの小説には、現代に通じる問題も数多く含まれています。

- ・植民地問題（例えばアフガン問題、朝鮮半島問題など）……『小公女』、『秘密の花園』
- ・疫病の蔓延（新型コロナパンデミック）……『赤毛のアン』、『秘密の花園』
- ・障害者（例えばパラリンピック東京大会）……『ハイジ』⁽⁵⁾、『秘密の花園』
- ・みなしご、孤児院（子供の貧困と労働、児童虐待、ネグレクト、毒親）……『小公女』、『赤毛のアン』、『ハイジ』、『あしながおじさん』、『秘密の花園』、『大草原の小さな家』、『長くつ下のピッピ』
- ・階級差、人種差別（社会的格差、BLM、ヘイトスピーチ）……『小公女』、『ハイジ』、『若草物語』、『大草原の小さな家』

・女性と子供の人権、ジェンダー……これは、これら9編すべてに共通するものです。（それは取りも直さず、男性の人権もいまだに尊重されていないことを知らしめるものでもあります。）

斎藤は、表向きは「良き伴侶を得て、良き家庭人となれ」という当時の穏健な「家庭小説」を装い

つつ、これら9編の少女小説の裏には、「型にはまらず、自分の道を自由に行け」というメッセージが仕込まれていると述べています。

日本のジュブナイルには、ジョーやアンやジュディに対抗できる少女たちは存在するのでしょうか？ フィクションでもなければ、19世紀から20世紀の作品でもありませんが、筆者は14歳のひとりの少女を思い起こしました。

はしるはしる、わづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず几帳の内のうち臥して、引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。

『更級日記』⁽⁶⁾の書き手、菅原孝標の女⁽⁷⁾が、断片のみにしか触れることのできなかつた『源氏物語』五十余巻を贈られ、たった一人で几帳に臥せて昼夜読みふけり、「プリンセスになるなんて問題にならないわ」というほどの喜びを得たことを綴る箇所です⁽⁸⁾。喜びを自覚的に選び取った、もう一人の、自由な魂を希求する少女。自己の生存権をかけて「世間＝世界」と戦わなければならなかつた9編の少女小説の主人公たちとは、立場も境遇も、国も、時代も、フィクションとノンフィクションとの違いもありますが、孝標の女は、ジョーやジュディの様に、「読む少女」から「書く女性」へと成長を遂げたもう一人の少女だったのでないでしょうか？

【注】

- (1) モンゴメリ『赤毛のアン』1908年(邦訳:村岡花子訳,初訳1952年/村岡美枝補訳,新潮文庫,2008年)。
- (2) 斎藤美奈子『挑発する少女小説』河出新書,2021年。
- (3) 斎藤美奈子(1956年—)。
- (4) この9編は、斎藤によると、
 - ・シンデレラ物語を脱構築するバーネット『小公女』1903年
 - ・異性愛至上主義に抵抗するオルコット『若草物語』1868年
 - ・出稼ぎ少女に希望を与えるシュペーリ『ハイジ』1880-81年
 - ・生存をかけた就活小説だったモンゴメリ『赤毛のアン』1908年
 - ・社会変革の意志を秘めたウェブスター『あしながおじさん』1902年
 - ・肉体労働を通じて少女が少年を救うバーネット『秘密の花園』1911年
 - ・父母の抑圧をラストで破るワイルダー『大草原の小さな家』シリーズ1932-43年
 - ・正攻法の冒険小説だったケストナー『ふたりのロッテ』1949年
 - ・世界一強い女の子の孤独を描いたリンドグレーン『長くつ下のピッピ』1945年です。
- (5) 『ハイジ』におけるこの問題については、本書でも参考文献に挙げられているロイス・キース『クララは歩かなくてはいけないの?——少女小説にみる死と障害と治癒』(藤田真利子訳,明石書店,2003年)があります。
- (6) 『更級日記』,1060年以降成立後,約170年を経て,定家によって発掘される。
- (7) すがわらたかすゑ 菅原孝標の女(1008-1060年)。むすめ
- (8) 浅沼圭司(1930年—)は、『読書について』(水声社,1996年)で、『更科日記』のこの箇所を取り上げ、「読むこと」についての美学的考察を行っています。

* この稿を作成するにあたっては、本書に関連する、2021年9月1日のTBSラジオ「アフター6ジャンクション」での、斎藤美奈子とライムスター宇多丸との対談、および9月11日の朝日カルチャーセンター「『挑発する少女小説』出版記念講座」における、斎藤美奈子の講演を参考にしています。

* 『挑発する少女小説』の帯に、大きなフォントで「子どもだから、女だからって、みくびらないで!」とあることが少々残念です。斎藤の論考はこの言葉では纏め得ないと思います。

執筆者について――

西澤栄美子（にしざわえみこ） 1950年生まれ。もと成城大学講師。専攻＝美学，フランス文学。小社刊行の主な著書には、『書物の迷宮』，主な訳書には，クリスチャン・メッツ『映画記号学の諸問題』（共訳），同『映画における意味作用に関する試論』（共訳）などがある。